

2020年5月17日  
東京聖三教会

使徒 17:22-31  
1 ペテロ 3:8-18  
ヨハネ 15:1-8

わたしの言葉があなたかたのうちにあるならば、  
望むものがかなえられる



日本聖公会東京教区  
東京聖三一教会

2020年5月17日  
東京聖三教会

使徒 17:22-31  
1ペテロ 3:8-18  
ヨハネ 15:1-8

わたしの言葉があなたかたのうちにあるならば、  
望むものがかなえられる

新型コロナウイルスのパンデミック(世界的大流行)は、感染症による直接的な被害以外にも私たちの暮らしに大きな影響を与えています。国際関係と社会全般で多くの変化が起こり、個人生活にも多くの変化が現れるでしょう。ある人は、イエス様の誕生前後を意味する BC(Before Christ)と AD(Anno Domini)が、コロナウイルス発生前後の BC(Before Corona)と AD(After Disease)として意味が変わるほどその変化が大きくなると言います。

コロナウイルスのパンデミックの原因や今後の取り組みについてもさまざまな意見が出ています。社会学者はグローバル化による過度な国際的移動がパンデミックのきっかけになったとも言っています。人間が自然と環境を疎かにしてきたせいで問題が大きくなったと環境論者は言っています。貧しい人々が多く犠牲となったことを指摘し、富の均等な分配のために努力すべきであるという主張も強まっています。私は、これらの話にはより良い世界への期待と「人生の根本を見直そう」という意味が含まれていると思います。

信仰者も根本的な問いに向き合うことになりました。礼拝が中止され、これまで共に行われてきた信仰生活もできない現実には根本的な問いを提起していると思います。果たして私たちは神様とどのように関係を結び、信者たちとどのように繋がり、信仰生活はどうすれば良いのでしょうか？ 神様なしに生きていく現実、教会に行かなくてもいい社会にな

ったのでしょうか？ 神様より医療と科学を信頼しなければならないのでしょうか？ これらの問いは最近のものではなく長らく続いてきたものです。そしてこれに対する答えも難しいです。けれどもコロナウイルスのパンデミックは、神様と信徒たち、そして隣人との繋がりについて改めて考えてみる機会になったに違いありません。

今日ご一緒に読んだ聖書日課には、イエス様が、ご自分をぶどうの木、神様を農夫として喩え、弟子たちに「私に繋がっていないさい」という願いが記されています。喩えですがあえて説明を加える必要はないでしょう。信仰者は、イエス様の体として一つになっていることを信じているからです。イエス様は、「私に繋がっていない人がいれば、枝のように外に捨てられて枯れる」と注意もしてくださいました。これは、イエス様がまもなくユダヤ人に捕えられ亡くなられる状況でおっしゃったみ言葉なので、切実です。当時の弟子たちのように私たちも恐れと危機の中に置かれているので、神様との絆の意味と大切さを新たに深く考えてみる必要があります。

危なさや危機に恐れと不安を感じることは、誰でも同じです。けれども多くの人々はその危なさや危機から脱することだけに没頭し、自分と辺りを客観的に見られなくなったりもします。ただ、自分に起きることと自分のことだけを考えます。知恵の書にはこのようなみ言葉が記されています。

「恐れとは、まさに理性の助けを捨てることである。理性の助けに頼む心が弱ければ弱いほど、苦しみの原因がますます分からなくなる。」  
(知恵 17:12-13)

この理性とは、私たちが使っている理性とは違う意味です。近代的な意味の論理的であり合理的である理性ではなく、「信仰的理性」、即ちみ言葉に従う「信仰の理性」を意味します。ですからこの知恵の書のみ言葉は、「信仰を持たないで現実を生きれば恐れを感じるようになる」という意味です。言い換えれば、恐れを乗り越えていくためには信仰を通して、「自分はどのような存在であるか」を自覚しながら生き

ていかなければならないということです。

それでは、私たちはどんな存在でしょうか？ 今日ご一緒に読んだ使徒言行録にはパウロの説教がこのように記されています。これは、ギリシアの詩人エピメニデス(Epimenides)とアラトウス(Aratus)の詩でもあります。

「我らは神の中に生き、動き、存在する」「我らもその子孫である」(使徒 17:28)

これは、私たちは「神の子」であるということでしょう。自分の力で、一人でいきているように見えるかもしれないけれども実は、神様の内で息をしながら生きていく存在であるということです。ですから、自分が神の子であることを確信しながら生きていけば、恐れることはないということです。けれども多くの人々は揺らいでいます。神様の姿を自分の目で見ることもできず、体験することも難しいからです。しかし、今日ご一緒に読んだ使徒言行録には、このように記されています。

「(人が)求めさえすれば、神を見出すことができる。…実際、神は私たち一人一人から遠く離れておられません。」(使徒 17:27)

私たちはイエス様と一つの体であるという言葉を繰り返し心の中に刻んでみてください。そうすれば、神様が近づいていらっしゃる。聖書のみ言葉を何度も読み直してください。そうすれば、神様が共におられることが体験できます。絆を結んで繋がるということは、共に悲しみ、共に喜び、人生をともに分かち合うことでしょう。イエス様は人々の不幸と苦みにともに心を痛めておられるということを思い出してください。イエス様はラザロが死んでしまったことに涙を流されました。信仰者の絆は時間と空間を超えます。さらには死の向こうの世界まで繋がります。ですからイエス様はラザロを蘇らせることができました。

私たちは、「人が私に繋がっており、私もその人に繋がっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」(ヨハネ 15:5)というイエス様のみ言葉にも注目する必要があります。これは、イエス様に繋がって絆を結んでいる時ごとに実を結ぶことができるという意味でしょう。それでは、この実とは

どんなものでしょうか？ イエス様はこのようにおっしゃいました。

「あなたたちが私に繋がっており、私の言葉があなたがたの内にもあるならば、望むものを何でも願なさい。そうすればかなえられる。」(ヨハネ 15:7)

イエス様と絆を結び、み言葉を心の中に納めて生きていけば、願いがかなえられるということです。これが私たちの実であり、希望であります。

しかし、私たちには課題があります。それは実を得るための課題であるかもしれません。使徒ペテロはこのように求めました。

「心の中でキリストを主と崇めなさい。あなたがたの抱いている希望について説明を求める人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。」(1ペトロ 3:15)

このみ言葉は、ペトロが小アジア地域で寄留者として暮らしている信仰者たち宛の手紙です。当時信仰者たちは、異邦人として蔑みと迫害を受けながら生きていました。そのように暮らしている人に課題を与えるとは行き過ぎると思われるかもしれません。しかし、当時の信仰者たちはこの言葉に従いました。そのお陰で、信仰は世の中に広まり、今日の私たちにも伝わるようになりました。もちろん、このような課題が負担に感じられる方もいらっしゃると思います。けれども勇気を出してください。私たちは実を結ぶことができる人々です。すでに洗礼を通して神様とともにする人になっているからです。ただ、もう少し時間を作れば良いのです。大きいことでもなくても良いのです。毎日少しずつ聖書を読めばできるものです。そして両手を合わせて隣人と教会の兄弟のために捧げる短い祈りも、素晴らしい実りになります。

アングリカン・アライアンス(Anglican Alliance)とアングリカン・コミュニオン(Anglican Communion)は、信仰者たちのためにこのようなメッセージを伝えています。

「教会は閉じていません。建物だけが閉じているのです。それは、私たちが教会であり、主イエスの生きている体であり、どこにでもいる存

在であるからです。](The church does not close, only the building. Because we are the church, the living body of our Lord Jesus and we are everywhere.)

このメッセージを通してイエス様との絆を確信し、共に試練を乗り越えていきましょう。

この一週、神様の中で共におられるという信仰を通して、この困難を乗り越えていくことができますように心よりお祈りいたします。